1. 研究の目的

今日の都市における住宅事情の中でも依然庭つき一戸建志向は根強い。最近は，戸建住宅地における街並の統一なども多くとりあげられている。一方，戸建住宅とマンション（集合住宅）の利点をとり入れたタウンハウスなどの新しい都市型の住宅形式も注目されている。

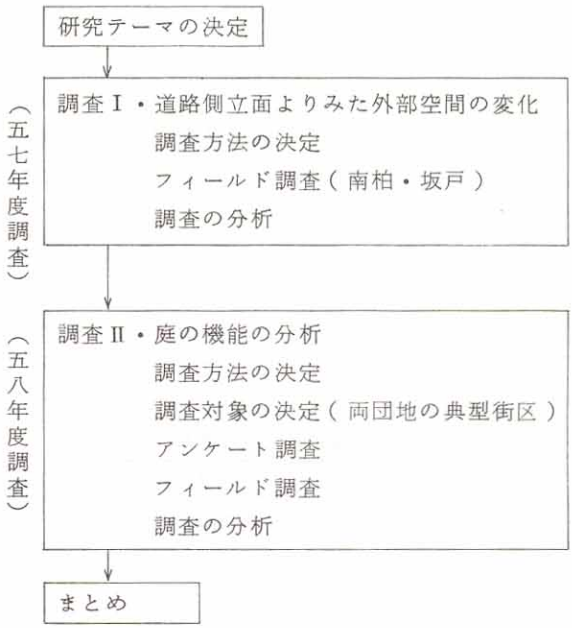
このような状況の中で戸建住宅地において集合住宅では失なわれがちな住戸まわりのオープンスペースのあり方，景観形式のなされ方について探ることは，今後敷地と建物をリンクした都市型住宅の住環境，街区環境のあり方を考えていく上でも有益であると思われる。

本研究は，第一住宅建設協会によって昭和３０年代に開発された南柏団地と，昭和４０年代から５０年代にかけて開発された坂戸団地において，その住戸外空間（庭の機能，玄関，勝手口まわり，塀や植栽など）が今日に至り，建設時と較べどのように変化してきたのかを把握することにより，戸建住宅地における庭の機能及び景観形成のなされ方について検討することを目的としている。

2. 研究の方法

この研究は，アンケート調査およびフィールド調査を中心に行なった。

主な研究手順は，以下のとおりである。



調査対象として，南柏・坂戸の戸建分譲住宅地を選んだ理由としては，分譲住宅地であるため同一仕様，平面計画の住戸が年月の経過とともにどのように変化したかを把握できること，建設後南柏は約２４年，坂戸は約８年を経過しており，両者の住宅地の変遷が比較できること，南柏と坂戸では敷地条件や街区形状が違うこと，などがあげられる。